ゴジラはなぜ品川から上陸するのか――主として江戸時代の資料によって品川の境界性を論ず

橋本章彦

一、はじめに

一九五四年に公開された『ゴジラ』が本稿の主な材料である。

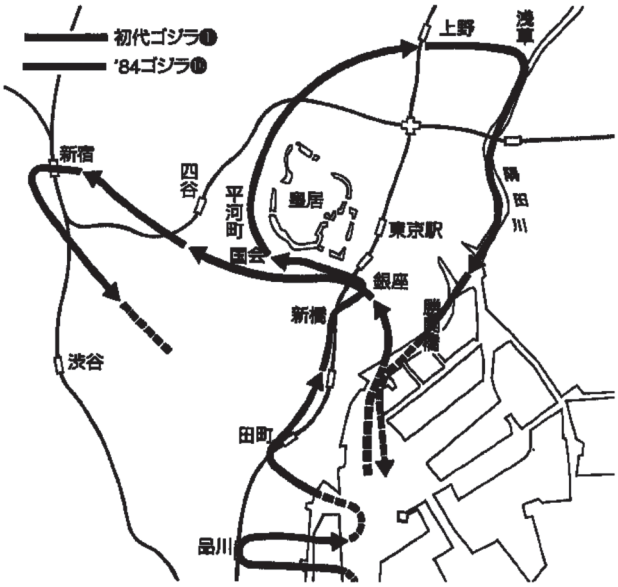
この物語でゴジラは、最初に大戸島に上陸した後、日本本土に初めて姿を現すのが品川であった。夜間、沖合の第2台場付近の海底から姿をあらわし、そのまま品川駅に至り、京急本線の八ツ山橋跨線橋を破壊して東京湾に戻る。じつはこのとき、観客は初めて闇夜に浮かぶゴジラの全身像を目撃するのである。そしてその後再び芝浦付近から再上陸し、東京を蹂躙することになる。ゴジラが本土を襲うに際して、なぜこのような二段階の上陸が構想されたのであろうか。

映画の中でゴジラは徐々にその姿を観客に見せるように構成されている。最初は、嵐の中の大戸島上陸シーンであり、破壊された家屋の合間に、ほんの一瞬だけ、しかも体のごく一部が動いていくのが見える。次は、大戸島へ派遣された政府の調査団が、山の向こう側から頸だけを表すゴジラのシーンで、その後品川上陸へと連なっていく。明らかにゴジラの全体像や凶暴性は、漸次的にあらわになっていくよう組み立てられているのである。したがって、いったん品川に上陸するのは、ゴジラの全体像とその破壊力をあらかじめ観客に見せるためのものであったと考えることは必ずしも荒唐無稽ではない。だが、このような見方では、最初の上陸地がなぜ品川であったのかについての説明にはならない。ほかの場所でも良かったはずである。

また、多くの論者によって太平洋戦争時の空襲の被害地域がゴジラが破壊した地域と重なることが指摘されている。たしかに東京へ上陸した後のゴジラは、東京空襲によって壊滅した地帯におおむね沿うかたちで移動している。しかし、これもまたゴジラの品川上陸の理由にはならない。もし空襲と関連しているのであれば、攻撃に主として使用された戦略爆撃機B29の主な侵入経路である房総方面から、ゴジラは上陸してもよかったはずである。しかも、ゴジラの破壊地域は、一回の空襲で破壊された地域と重なるのではなく、太平洋戦争末期までの度重なる爆撃の結果で壊滅した地域をなぞっている。しかし大きな被害を出した一九四五年三月一〇日のいわゆる東京大空襲の被害地域は通っていない(1)。

いったいゴジラは、東京を破壊するに際して、なぜその最初の上陸地が、品川でなければならなかったのであろうか。そこには、制作者も観客もそうであることに違和感を生じない、いたって自然な理由が存在したはずである。

本稿では、この問題に主として歴史民俗学的な視点から考察を加えていこうとおもう。



「学問的ゴジラ―来襲ルートを解説」
（『科学朝日』1994年1月）

二、ゴジラの上陸

考察をはじめるにあたって、まず物語の中でゴジラがいかなるコースをたどったかを確認しておこう。

最初に姿を現すのは、太平洋上の架空の島である「大戸島」である。その後、派遣された被害調査団もこの島でゴジラを目撃することになるから、ゴジラは暫くこの付近の海域に留まっていたことになる。

次にあらわれるのが品川沖である。台場のいくつかを背景に海中から姿を現すが、このときはそのまま海に消えた。しかし、その後、再びほぼ同じ海域から現れそのまま夜の品川へ上陸していく。映画には描かれないが、当時造成中でその輪郭が浮かび上がっていたであろう品川埠頭を横切り品川駅構内へ侵入、折から構内に入ってきた往年の名機関車ＥＦ58が引く列車を蹂躙したあと、京急本線の八ツ山橋跨線橋を破壊して再び東京湾へと去る。

ゴジラの再上陸を恐れた政府対策本部は、東京湾岸全体に高圧送電線を張り巡らせ上陸したゴジラの感電死をはかる作戦を企画する。その工事が完成した頃、再びゴジラが上陸する。それは芝浦海岸あたりであった。そこから第一京浜道路を北へ進行、札の辻で第四十九戦車隊を全滅させた後、芝公園あたりを通り新橋から銀座へ

といたる。銀座では服部時計店の時計台や松坂屋を破壊、そのまま有楽町へ至って日劇を蹂躙する。そこから進路を西にとり国会議事堂を襲い、さらに平河町でＨＨＫの電波塔を倒壊させる。そのとき電波塔にいた多くの放送記者たちが殉職するシーンは印象深い。ゴジラはその後皇居を右回りにまわる進路で上野にいたり、そこから隅田川を南下して、最後に勝鬨橋を破壊して東京湾へと去る（2）。

三、江戸・東京の境界意識と『ゴジラ』

（一）東京湾と品川

江戸時代において品川は海陸の玄関口であったことは重要である。

江戸湾は品川沖より以北については水深が浅かったため、大きな船は品川沖までで、そこに停泊して積荷は瀬取船で沿岸各地へ運んでいた。『地誌御調書』巻上に、

品川湊の儀は諸国廻船何れも沖懸りにて、地方より拾町余より壱里程宛も相離れ船懸り致候儀にて、御府内廻船問屋共引合に付、当所には問屋共無二御座一候（3）

とあって、その様子をうかがい知ることができる。

貢米については、次の資料よりその瀬取りの方法が知られる。すなわち

一、御廻米品川沖瀬取之儀、廻船問屋者壹番組より十一番組迄沖瀬取世話いたし候。茶船宿も六組に相分り有レ之。夫々仲間申合之掟を以、前々より壹組之内之御廻米者、何艘入津いたし候ても、壹組限り之茶船にて瀬取いたし、他組に明船有レ之候而も不二差出一、手狭にて差支之段申立、以来は御廻米積受候節は、廻船問屋幷茶船宿共御勘定所直取扱にいたし、廻船方三人之者共より差図を受、瀬取いたし候様仕度旨申立候（以下略）

とあって、廻船問屋十一組、茶船宿六組にわかれて一組ずつ瀬取を行っていたようである。しかしながら、密売買も横行した。

近年品川沖より湊内まで諸廻船懸居候処へ、町中より小船を数多乗出し、中途にて廻船乗組之水主と出買之者共馴合、不埒成商売物隠買仕候故、積荷物不足有レ之、船頭幷問屋ども難儀之由申出候。向後中途にて万物堅買取申間敷候之事（享保六年の町触）

こうした触は、寛保元年、宝暦十年、安永四年、天保二年にも出されており、密売が容易に収まらなかったことを示している。こうした事実は「江戸湊が遠浅の為」(4)であったがゆえに起こりえる東京湾特有の地理的環境によるところが大きいであろう。

また江戸湾は、潮干狩りの名所が数多くあったこともよく知られている。『東都歳時記』（斎藤月岑編、天保九年・一八三八刊）三月三日の条には、潮干狩りの名所として

芝浦。高輪。品川沖。佃島沖。深川州崎。中川の沖（早旦より船に乗じてはるかの沖に至る、卯の刻過より引き始めて、午の半刻には海底陸地と変ず、ここにおりたちて蛎蛤（かきはまぐり）を拾ひ、砂中のひらめをふみ、引き残りたる浅汐に小魚を得て、宴を催ほせり）。

と記されている。これらの地名はすべて江戸湾の品川より以北の沿岸のものである。現在においても東京湾沿岸に干潟が残されていることは注意しておいても良いであろう。

ここで注目すべきは、品川沖そのものも潮干狩りの名所とされていることである。したがって大型の船は沖合に繋留しなければならなかったわけである。

ところで、現在でも品川には天王州や鮫州などの地名が残っている。州はいわゆる浅瀬のことである。鮫州については次のような伝説が残されている。

建長三年（一二五一）というから鎌倉時代、有名な鎌倉建長寺が建立された時代であるが、品川沖に大きな鮫の死んだのがただよっていた。土地の漁夫がこれを海岸に引揚げて腹をさくと、なかから木像の観音様が出てきた。人々は不思議なことだというのでこの観音を祭って供養をし、この土地を人々は鮫洲と呼んだ。この話が時の執権北条時頼に聞こえて、かれはそれは珍しいことだ、伽藍一宇を建てて安置するようにというので南北二〇町余、東西一〇町余の寺域を賜い、また寺領として一〇〇貫文の土地を寄付した。これが南品川海晏寺の開基であるという話が『新編武蔵風土記稿』の品川海晏寺の項に出ている。弘化二年九月に作った「沿革御調ニ付品川領宿村書上控」にもほぼ同じ話がのせられているが、こちらには鮫の揚がった時が建長三年五月七日と、月日まで入れて書いてある(5)。

また鯨塚というものもあり、是には次のような話が伝えられている。

『江戸名所図会』高輪大木戸付近の賑わい
（『日本名所風俗図会』角川書店所収）

魚と関係する地名にいま一つ鯨塚というのがある。場所は御林町の八幡神社の境内である。嘉永四年（一八五一）四月十一日の朝がた御林町の海岸に一頭の鯨が漂ってきた。これを見つけた同町の漁師たちは、さっそく全員総出で海岸に引きあげ、そのことを村役人に届出、村役人からさらに代官所に届出た。代官所からは手代の秋葉金次郎という者が出張して来て、仔細に見分したうえ規則通り入札にして、大井町吉太郎なる者が落札した。これがさらに深川の越前屋茂兵衛に転売され、かれはこれを浅草で見せ物にしていたが、日がたつにしたがって腐り始めたので油を絞って販売した。そして後に残った頭骨を、鯨があがった土地の八幡神社に埋めて供養した。これが鯨塚である(6)。

これら鮫や鯨のような大型の海洋生物が打ち上げられるといった伝承の背後には、やはり品川沖の海までが一定の深さをもっていて、それより奥は浅くなるという人々がもつ地理的なイメージが関与していることを示しているように思える。

つまるところ、何にすれ海からやってくる大きな物は、品川までしか入れない地理的な事情があったわけで、その意味でもここは玄関口にあたっていたわけである。

（二）江戸の喉元としての品川

一方、陸路においても品川は江戸への入り口であった。

慶長六年（一六〇一）東海道の宿駅に指定された後、江戸の玄関口として陸路の要所としても栄えることになった。

加賀藩主が金沢から東海道経由で江戸に入ったときの記録である『東海道通行記』（享和二年・一八〇二）に

品川宿は東海道五十三次の首駅にて、東都江戸の喉口なる故に、平常賑しき事他駅に異なりき

とあって、その繁栄ぶりがうかがえる。また『東海道名所図会』（秋里籬島、竹原春泉斎ほか画、寛政九年・一七九七刊）にも

東都の喉口にして常に賑しく、旅舎軒端をつらね、酒や・肉や海座敷をしつらへ、客を止め、賓を迎へて糸竹の音、今様の歌艶しく、渚には漁家おほく、肴わかつ声々、沖にはあごと唱ふる海士の呼声おとづれて、風景至らずといふ事なし

とあって同様の記録が見られる。これらはいずれも幕末頃のものであるが、万治年間（一六五八～一六六一）の『東海道名所記』（浅井了意）にも

品川の宿にハ、遊女おほし。旅人のとをるとき。手あらひける女のはしり出て、まねきとむるをミて、男かくぞよみける。
旅人の過るをとめてうちまねく手のしな川ぞぬれてみえける

とあるから、江戸初期の状況も大きく変わらなかったようである。おそらくは一九世紀頃と思われる時期の状況は、食売旅籠屋（九二軒）、平旅籠屋（一九軒）、水茶屋（六四軒）、煮売渡世（四四軒）、餅菓子屋（一六軒）、蕎麦屋（九軒）、その他酒屋、たばこ屋、すし屋、小間物屋など一六〇〇軒。人口は七〇〇〇人であったという(7)。

ところで、品川を表現するのに「東都の喉口」と言われていることには注目しておいても良いであろう。東海道について言うならば、品川は「高輪の大木戸」のすぐ外側にあたっていた。「大木戸」とは江戸にもうけられた木戸で、人や物品の流出入を管理する目的を持っており、そのため夜には閉じられていた。他には四谷（甲州街道）、板橋（中山道）に置かれていたが、木戸のすぐ外側に位置する品川は、まさに「喉口」と言うにふさわしい位置にあったわけである。『江戸名所図会』（天保年間、斎藤長秋編）の「高輪大木戸」の項には、

高輪大木戸　宝永七年庚寅、新たに海道の左右に石垣を築かせられ、高札場となしたまふ（その初めは同所、田町四丁目の三辻にありしゆゑに、今もかの地を元札の辻と唱ふ）。この地は江戸の喉口なればなり（田町より品川までの間にして、海岸なり）。七軒と云ふ辺は、酒旗肉肆海亭をまうけたれば、京登り、東下り、伊勢参宮等の旅人を、餞り迎ふるとて来ぬる輩、ここに宴を催し、常に繁昌の地たり。後には三田の丘綿々とし、

前には品川の海遙かに開け、渚に寄する浦浪の真砂を洗ふ光景など、いと興あり(8)。

とあり、ここでも「喉口」という言葉が使われ、そこに高札場があったことが記されている。ここで「元札の辻」とあるのは、現在田町駅近くにある札の辻交差点にあたる場所である。現在でも、第一京浜道路と桜田通り方面への分岐点で交通の要所となっているが、江戸時代においても江戸城に通ずる重要な交差点であった。そのため江戸の六大高札場の一つがここにおかれることになった。それ以前には芝口門があり、江戸の入り口としての機能も果たしていた。実は『ゴジラ』（一九五四）では、この札の辻が重要な意味を持つことになる。

ともあれ、これらの資料から見て、品川から高輪周辺が江戸の出入り口としてのイメージで捉えられていたことはほぼ間違いないようである。それが故であろうか、旅の送迎もこの地で行われたのである。右に示した資料中の「京登り、東下り、伊勢参宮等の旅人を、餞り迎ふるとて来ぬる輩、ここに宴を催し、常に繁昌の地たり」とあるは、それを端的に示しているであろう。図2の右画面上部にある石垣が大木戸の石塁であるが、その場所で旅人を見送る人々の姿が描かれているのが見える。まさに品川一帯は、「いわば江戸の玄関口として旅行者の送迎の地であって、宿駅というよりはむしろ社交の場として、大変賑わった所」(9)だったのである。

明治天皇も東幸に際して、品川に一泊して次の日になって皇居に入っている。すなわち『明治天皇紀』によれば、明治元年九月二十日の条に「京都御発輦、東京に幸したまふ」とあってこの日に京都を出発、二十二日あまりの旅行の後、十月十二日「未の半刻品川駅に着御」し、「行在所本陣鳥山金右衛門の家」に入った。品川では、議定心得東久世通禧、同じく長岡護美、参与大久保一蔵、同じく大木民平らが奉迎に出、明治帝に拝謁している。帝は翌十三日卯の半刻に板輿に乗って品川を進発した。このときは大総督熾仁親王、鎮将三條実美、東京府知事烏丸光徳らが「品川に奉迎し先導」した。天皇は、途中高輪の久留米藩主有馬頼成の邸宅に小休止し「品海の景を叡覧あらせられ」た後、芝の大木戸を経て新橋、京橋、呉服橋見附を経て増上寺に再び小休止し、その後和田倉門より江戸城へ入った(10)。

また次いで東京に来た皇太后もまた前日に品川に一泊している。すなわち『明治天皇紀』明治五年四月十一日条に

皇太后の東上を迎へたまはんがため、午後一時三十分騎馬にて御出門、品川に行幸あらせらる。是の日、皇太后は神奈川御発輿、大森に於て皇后の出迎を受け、午後四時品川に著し旧本陣鳥山金右衛門の家に入りたまふ、既にして天皇御往訪あり、直に還幸あらせ

らる、翌十二日、皇太后品川を発し、午前九時赤坂離宮に入りたまふ(11)

とある。このとき皇太后を迎えるために天皇は品川に入り、またそれより先皇后は大森まで迎えに出ている。ちなみに大森とは品川宿の南の外れに位置し、この地域の東海道沿いには著名な鈴ヶ森の刑場があった。

このように天皇の行幸などに際して、前泊や奉迎に品川が使われているのは、江戸時代における品川の歴史地理的な機能と大いに関係していることは容易に察し得る。あるいは東京になじみの薄い皇室が、関東の人々の習俗を意図的に取り入れようとした結果であるかもしれない。次の記録は、そのことを示唆しているように思える。

供奉の親王・公卿・諸侯は衣冠帯剣、三等官以上の徴士は直垂帯剣にて皆馬に騎す、初め輔相岩倉具視以爲らく。関東の人民は久しく覇政に慣れ、風俗自ら慓悍を免れず、之れを制馭するには先づ朝廷衣冠の礼を観しめ、以て其の心を和にするに加かざるなりと、之れを議定・参與に諮り賛同を得、是に於て鹵簿の厳儀を加ふ(12)

これによって、「関東の人民は久しく覇政に慣れ、風俗自ら慓悍を免れず」ということから意図的な演出として荘厳な行列が実施されたことがわかる。行幸についての品川に関わる事実もあるいはそうした演出が背後に意図されていたのかもしれない。むろんそのことをより確実にするためには、他にも資料が必要となるが、本論の主旨からは外れるのでいまはおく。

ともあれこうした資料からも品川が江戸の陸上交通の上でも「喉口」であり、その意味で玄関口であったことが知られるわけである。

四、品川の境界性

ところで、行政上の江戸の境界線はどのように決められていたのであろうか。その点でもっとも著名なものは、文政元年（一八一八）のいわゆる「江戸朱印図」である。これは江戸府内をどの範囲とするかについての目付の疑義に答える形で審議の末にときの老中阿部正精によって提示された幕府の公式見解である。その成立過程の詳細(13)については、本論の趣旨から外れるゆえに今はおくとして、この図では、城郭を中心にして内側に墨引がひかれ、さらにその外側に朱引が線引きされている。墨引の内部は、町奉行所の支配地域を示し、朱引は寺社の勧進活動が許される範囲にほぼ該当する。この朱引線の内部が江戸府内ということになる。このころの江戸は、

城郭を中心として同心円的に二重構造として認識されていたというわけである。

では、品川はそこではどのような位置にあるのであろうか。実は、目黒川を挟んだ南北の品川宿は、墨引のすぐ外側、朱引のすぐ内側に位置している。すなわち江戸府内ではあるが、町奉行の支配を受けない地域なのである。天明八年（一七八八）の評定所の決定(14)によれば、品川は、江戸払の南限に入っており、この点からも品川は江戸府内であった。しかしながら、府内に属しながらも町奉行配下にはないという混沌とした位置に置かれていたわけである。いうならば、江戸において南側つまり東海道側における境界域であったと言えるであろう。しかも、そこは、先にも示したように一大歓楽街を成しており、その意味からも周縁的な場所だったと言えよう。つまり、品川は地理的、行政的、人々のイメージのいずれにおいても境界的な性格を持っていたのである。

五、近代人における品川のイメージ

以上、主として幕末の資料を使って品川のもつ境界的性格について述べてきた。では、近代の人々における品川のイメージは如何様であったのであろうか。言うまでもなく本論で問題にする『ゴジラ』（一九五四）は、戦前から戦後に生きた人たちによって構想されたものである。したがって近代の人々、ことに東京に生活する人々の品川に対するイメージを考慮しなければならない。ただし、その点については、手元にいまだ適当な資料をもたず、今後の課題である。だが、次に示す資料は注目しておいて良い。これは、昭和七年（一九三二）に品川町があたらしく東京に編入され品川区となった年に出された紹介記事である。

新東京のプロフィル（一）―品川区の巻―
由緒深い品川・大井と躍進又躍進の大崎町
品川町　江戸人にとって、品川の称呼は今もなつかしいものゝ一つである。
それは、失はれた封建美への淡い郷愁であり、数多の物語りを通しての甘美な追想である。五十三次の宿駅として殷賑を極めた往古の様が幻想の絵巻物を展げる……
何十万石何某の殿様のいかめしい行列、遠く伊勢参り、近くは川崎お参りの善男善女、上り下りの商人、酒焼けの胸はだけた浪人、盆莚の争ひから人を殺めて、草鞋をはくお馴染みの三度笠股旅のやくざ、艶なる足弱を引き具しての、そねまれ旅の主人公、飯盛女の姦しましい呼び声、馬のいなゝき、駕籠の「エー、ホー」、落語の熊さん、八っさん……

で、今の品川は、京浜国道の坦々たるドライブ・ウェイ、自動車・電車・自転車・汽車の品川だ。工場・煙突・品川停車場の品川だ。

品川の町に入ると、さすがに潮の香が鼻をつく。「昔日の繁盛なきも」と案内記は言ふが、見るだに活気溢れた近代的の賑ひだ。人口五万五千六百三十九人の、一年五十九万余円を費ふ品川町。

工業の二万一千は総人口の三十八％だから品川町は、さしづめ工業を主とする町であると謂へる。水産業八百九十四人とあるが、之は昔の漁村品川村の伝統的の仕事だ。海苔の年産額七十五万円、魚類及び貝類二十五万の合せて百万円の水産業である。

隣接町村名物の二部教授のないと言ふのが此の町の何よりもの自慢、羨しいことに、尚教室を余する状況とあるから品川町の児童は幸福である。更に町の名物は、寺の多いことである。試みに之を挙げれば、海晏寺・海雲寺・本光寺・妙国寺・東海寺・品川寺、而もこの寺が皆由緒深い古刹ばかりである。

毎度移転問題で騒がれる品川遊廓も、此の町の名と共に古い。「明和三年飯盛女五百人置くを許す、之今の貸座敷の起源なり」とある。

品川町に沿ふ海浜も昔は名所の一つであったらしく、袖ヶ浦と称し、竹柴浦の一部をなし風光愛すべしとあるが、今は海苔のしびの羅列で、おはぐろ溝ならぬ、おはぐろ海である。

土地の人呼ぶ所の富士山の頂上品川神社に登って見ると、一望の内に東京湾を望むことが出来る。都の土産に「なぎたる夕のおぼろおぼろと見え渡るさま、安房上総目の前なるべし」とあって、昔日の眺めのほども思はれるが、今は東京湾の汽船の煙に、安房上総も見えぬ。

黒船の脅威時代のお台場砲台が今は寝れるデルタのように、静かに横つて居る。「海へ伸び行く大東京」の姿が、心強く眺められる。江戸時代桜の名所として知られた北品川御殿山は、今は住宅街として街の雑音を遙か下に聞く、静かな一廓をなして居る。

（後略）(15)

文中に「土地の人」という表現があることからみて、この記事を書いた人物は、おそらく品川在住の人である可能性は薄い。ここで注目されるのは、江戸時代との関わりの中で品川が紹介されていることである。冒頭の「江戸人にとって」という表現は、文脈上明らかに昭和七年を生きる東京人を指しての謂いである。東京に住む人々にとって品川は、江戸時代のイメージとオーバーラップさせて認識され得る場所なのであった。また「品川の町に入ると、さすがに潮の香が鼻をつく」という文章は、その背後に品川が中心的な場

所ではなく、都心からは少し離れた場所であるとのニュアンスを読み取ることができる。つまり近代人にとっても品川は周縁であったのである。そもそも品川が東京に編入されたのが、明治の東京成立よりはるか後の昭和七年であったことは、都心の人々の品川へのイメージに大きな影響を与えたものと思われる。むろん右の資料一つをもって断定することには慎重でなければならないが、近代における品川のイメージもじつは江戸時代のそれを基礎としたものであった可能性を考えておくことは必ずしも無稽なことではないように思われる。

六、境界を越えるゴジラ

ここにいたって漸く「ゴジラ」の品川上陸について一つの仮説を提示できる段階となった。

それは、第一に品川が都心への海陸の入り口、江戸時代の表現を借りれば「喉口」にあたっていたことが重要である。外海から東京湾に侵入してきたゴジラは、その大きさからして同じく外海から来る巨船の如く、あるいは鯨や鮫などの大型の水中生物が品川沖に流れ着いたように、その巨体を海中に隠すことができるのは品川沖までだったのである。

また品川上陸後にいったん海に逃れたゴジラが再び上陸するのが芝浦海岸であるのも、そこが江戸時代木戸のおかれていたやはり東京への入り口にあたる地域とのイメージがあったからという可能性が高い。一九五四年の段階で品川の奥の東京港へ大型船の航路が開かれていたとはいえ、品川沖から以北はやはり浅瀬であり、その点においても違和感がない(16)。

物語構成上で境界の意識が確かに存在したことは、札の辻における次のエピソードが端的に示してくれている。すなわち、ゴジラの進行を防ぐため札の辻の防衛ラインには第四十九戦車隊が配置されていた。今日でもそうであるが、陸上戦闘において戦車はもっとも強力な武器であった。それが札の辻に集中的に配置されるということは、そこが東京防衛上重要な場所だったからである。江戸時代には門がおかれ高札場があったごとく、札の辻は都心への最後の入り口として重要な防衛拠点だったのである。そこを突破されることは、都心へゴジラの侵入を許すことになり、それは防衛の失敗を意味したと思われる。物語では札の辻の戦闘で第四十九戦車隊が全滅した後、ゴジラの排撃作戦を中止し負傷者と避難民の誘導に全力を尽くすように各部隊に指示が出されている。

すなわち、

対策本部

ひっ切りなしに入る各地からの情報

（中略）

「二一五号車より報告　札の辻警戒陣地は、突破され第四九戦車隊は全滅、以後の行動不可能」

「警戒本部司令第一二九号　警戒本部司令第一二九号」

新橋付近

パトロールカーに寄って司令を聞いている警官達

スピーカー「…爾後、各隊は攻撃態勢を解き極力消火につとめると共に、負傷者の救出に全力を傾倒せよ」(17)

とある。

これは以後東京防衛を断念したことを意味している。このエピソードは、札の辻の境界としてのイメージがあってこそ、その意味が理解できると言えよう。

第二には、映画の公開された昭和二九年段階においても、品川がいわゆる赤線（売買春）をも含んだ大きな歓楽街であったことである。このゴジラは光を嫌うという設定がなされている。ゴジラはあるいは品川歓楽街の明かりに誘われたのかもしれない。ただし、破壊するのは旧品川宿などではなく品川駅とそのすぐ南側の八つ山跨線橋である。だがこれらは品川を象徴的にあらわす構築物である。ゴジラは常にランドマークを破壊する。品川駅を破壊することは、それはそのまま品川を襲ったに等しいのである。

ゴジラが品川へ上陸するその理由は、江戸時代以来ながく受け継がれてきた「喉口」としての、また境界域としての品川とその周辺のイメージが背後に横たわっていた、いまはそのように理解しておきたい。

注

（1）野村宏平『ゴジラと東京　怪獣映画でたどる昭和の都市』（一迅社、二〇一四年八月）。

（2）（1）に同じ。

（3）『品川町史』（品川町役場、一九三二）一〇二頁。

（4）（3）に同じ。一〇二頁。

（5）『品川区史』通史編巻上（東京品川区、一九七三年三月）四四三～四四四頁。

（6）（5）に同じ。四四五頁。

（7）品川区文化財研究会『品川区の歴史』（名著出版、一九七九三年三月）二〇頁。

（8）『日本名所風俗図会』（角川書店）。

（9）（7）に同じ。二〇頁。

（10）宮内庁『明治天皇紀』第一（吉川弘文館、一九六八年三月）。

（11）宮内庁『明治天皇紀』第二（吉川弘文館、一九六九年一〇月）。

六六七頁。

（12）（10）に同じ。八六五頁。

（13）千葉正樹『江戸名所図会の世界―近世巨大都市の自画像―』（吉川弘文館、二〇〇一年三月）第四章「都市江戸の空間認識」参照。

（14）『徳川禁令考』二九八七。

（15）『品川区史』資料編（東京品川区、一九七一年六月）一〇九一頁。

（16）国際港としての東京港の開港は昭和一六年五月のことであった（『東京港誌』東京市役所、一九四二年三月）。

（17）村田武雄・本多猪四郎『ゴジラ』撮影台本決定稿（竹内博・村田英樹編『ゴジラ１９５４』実業之日本社、一九九九年十一月）八四頁。